

## 新著紹介

## 文化科學と自然科學

リツカート著  
近藤哲雄譯

大村書店發行

歴史哲學の現状に就て語りうとする者は誰でも先づリツケルトを知らねばならない。彼の思想を窺ふに最も纏つた材料は、クノール・フイツシアアの紀念論文集、「二十世紀初頭の哲學」(Die Philosophie im Beginn des 20. Jahrhunderts)の中に收められた「歴史哲學」(Geschichtsphilosophie)である。彼はこの論文に於て歴史哲學の課題を根本的に展開して、それを歴史科學の論理、歴史的生活の原理及普遍史としての歴史哲學と云ふ三つの部分に分つた。これらの中彼がこれまでその研究を發表したのは主として、彼自ら歴史哲學の基礎であり出發點であるを考へてなる史學の認識批判に關する部分である。彼はその主著を「自然科學的概念構成の限界」(Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung)と呼んだ。カントに依つて世界觀としては打勝たれた自然主義を方法論の方面に於て打破り、歴史科學の獨立性の根據を究め、その概念構成の論理的構造を明らかにせんとするの謂である。今近藤氏の譯された「文化科學と自然科學」(Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft)はこの書への入門書であるを著者が云つてゐる。それは自己の活動の本質を理解したいとの要求を感じてゐながら、廣汎な論理的著述を讀むの興味と時間とを缺いてゐる特殊科學の専門家に役立つやうに書かれた。私は一般の讀者に手

頃なこの書物が必ずその最初の目的を達するであらうと信ずる。そしてそれは學問分類の問題が極めて紛糾したものであり、一見甚だ單純に見ゆる普通の圖式もそれほど確實なものではないことを明瞭にし、この範圍に於ける徹底的な研究を喚び起すであらう。實際今日史學認識論くらゐ有爲な學者の美しい協力を必要とするものは少いのである。

譯語は多少無理な譯し方であると感じられる箇所が散在してゐるやうに覺ゆる。私は譯者が改版の序にもう一度校訂され、そしてその豊かな才能を惠まれることを希まなかつたならば、貧しい我國の學界にとつて非常に幸福なことであると思ふ。

## 内容

一、問題。二、歴史的狀態。三、根本對立。四、自然と文化。五、概念と現實在。六、自然科學的方法。七、自然と歴史。八、歴史と心理學。九、歴史と藝術。一〇、歴史的文化科學。一一、中間領域。一二、分量的別性。一三、没價值的個別性。一四、文化歴史の客觀性。

東京淺草區花川戸六五、大村書店發行。定價壹圓四拾錢。(三水清)

## 寄贈書籍雜誌

## 批評的倫理學

渡邊龍聖著

東京 開發社

## ラスク著法律哲學

法學士恒藤泰次譯

東京 大村書店